



ご挨拶

第90回総会会長 河野 茂
(長崎大学理事, 副学長)

第90回日本結核病学会総会は「抗酸菌感染症制圧を目指して、新たなステージへ」をテーマに掲げ、平成27年3月27日(金)、28日(土)に長崎ブリックホールで開催されました。他学会との日程重複にもかかわらず、遠く長崎の地まで約1000名を超える方々に足をお運びいただきました。プログラム委員をはじめとする関係者の皆様、そしてご参加いただいた全ての方々のご協力を賜り、本総会を盛会裏に終えることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本総会は第90回という日本結核病学会にとっては節目の年の開催でした。そのため、最新の学術的知見を共有する場である総会としての役割に加えて、わが国の結核診療のこれまでの歩みを振り返り、現在までに解決への道筋が示された問題の確認とわれわれが解決すべき課題を明確にし、将来へ向けた道筋を切り開くための学会として位置づけさせていただきました。確かに日本の結核罹患率は激減しています。しかし、一方で非結核性抗酸菌症は急速に増加傾向であり、病態も依然として明らかではなく、根本的な治療法もないため、具体的対応策の速やかな構築が求められています。本総会のテーマを結核に限定せず、“抗酸菌感染症の制圧”とした大きな理由であり、非結核性抗酸菌症関連の一般演題が8セッションと多数に及んだことから、臨床的重要度の高さは疑う余地がありません。さらに減少傾向に転じたはずの結核も、社会背景を反映した高齢者結核の増加や重症・難治例の増加、多剤耐性結核、外国人結核などといった新しい難題を抱えています。また、まだ報告は少ないものの、抗酸菌感染症とアスペルギルスなどの真菌感染症の合併例は治療に難渋し重症化することが多く、今後の動向を注視していく必要があります。いつの時代も感染症は社会を映す鏡であり、患者背景が多様化

する現代において、今後は患者一人一人の病態を考慮した、これまで以上に繊細な治療が必要となってくるでしょう。偉大な先人たちが築いた栄光の上にあぐらをかくのではなく、抗酸菌診療に携わる者一人一人が危機感と自覚をもち、地域・行政をも総動員した包括的医療体制の整備が、今まさに求められているのではないのでしょうか。

昨年9月に、デラマニド（デルティバ[®]）が抗結核薬としては実に約40年ぶりの新薬として登場しました。結核診療に携わる者にとって大変喜ばしいことではありますが、いかにしてこの新薬を耐性化させることなく適正使用を行うか、その使命もまた背負ったわけです。「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない。唯一生き残るのは、変化できる者である」という格言をしっかりと受けとめ、刻々と変化する結核を取り囲む状況に、柔軟かつ的確な対応が望まれています。今回の総会では、まさに変化するわれわれを体現するかのような、新規性・独走性に富んだ素晴らしいご発表の数々をいただいたと思っております。抗酸菌感染症診療の明るい未来のために、本学会が今後も日本、そして世界を牽引する役割を担うことを期待してやみません。